
カントボーイ専門粘膜開発クニサロン ～疲れた理系男子が舌だけで身体も理性も何度も溶かされていちゃ甘潮吹きに沼るまで～

導入

俺、橘優斗は、理系だ。

大学では半導体工学を専攻し、大学院を出てからはずっと回路設計の仕事をしている。論理と数式とシミュレーション。原因があれば結果があり、ノイズには必ず発生源がある。そういう世界で十五年近く生きてきた。

三十一歳の春、健康診断で「骨盤内血流不良」と診断された。産業医は「整体の一種です。保険も効きますから」と言って紹介状を渡してきた。慢性的な腰痛と目の奥の鈍痛。肩と首は石のように凝り固まっている。休日は寝て終わる。趣味もない。身体のことなど完全に置き去りにしてきたツケが回ってきたのだろう。

予約当日、俺は指定されたサロンの前に立った。白い外壁に控えめな看板。自動ドアを抜けると、ラベンダーとユーカリのアロマが鼻腔をくすぐる。白基調の内装に淡い間接照明。高級ホテルのロビーを思わせる静謐さだった。受付の女性に案内され、紙のような薄い施術着に袖を通す。少し肌寒い。ベッドにうつ伏せになると、ほどなくノックの音がした。

「初めまして。本日ご担当いたします、神崎と申します」

低く落ち着いた、耳に心地よい声。長身で肩幅の広い、モデルのような男だった。白衣の下筋肉質な身体。彫りの深い顔立ちに、眼鏡の奥の切れ長の目が優しく細められる。

（なんだ、男性か……）

俺はうつ伏せのまま「よろしくお願いします」と言った。

「橘様、本日はまず背中と腰の状態を拝見しますね。……ああ、これはかなり固まっていっちゃる。特に肩甲骨の内側、岩のように張っていますよ」

温かいオイルをたっぷりと含んだ手が、肩から背中へ、そして腰へとゆっくりと下りていく。凝り固まった筋肉が解れていく感覚に、俺は思わず深い息を吐いた。

（これだけで十分気持ちいい……確かに、高いだけのことはある）

神崎の手が腰のあたりで止まり、静かな声が続ける。

「橘様、腰部から股関節にかけての血流がかなり滞っています。このままだと腰痛が慢性化するだけでなく、内臓の働きにも影響が出ます。本日は骨盤内の血流改善を中心に施術いたしますので、ご了承ください」

「え、あ……はい」

「では、少し下半身のほうに触れますね。失礼します」

そう言うと、神崎の手が施術着の腰の部分をつかき上げ、下着ごとゆっくりとずらし始めた。

（え……ちょ、まさか、下着まで……？）

動揺で声が出そうになる。瞬間、神崎の指が俺の太腿の内側をかすめた。

「ん……ッ！」

自分でも驚くほど敏感に、身体が跳ねた。それと同時に、ピリピリとした刺激と、下腹部がじんわりとする感覚。

（え……これ、何だ……？ 俺、濡れて……？）

神崎の指が、俺の股の間—今まで誰にも見せたことも触れられたこともなかった割れ目に、そっと触れる。くちゅり、という小さな水音が、静かな施術室に響いた。

「……あの、施術って……」

「ご心配には及びません。正常な生理反応です。ここが橘様の膣です。初めての施術では、このように身体が自然に反応することがよくあります」

（膣って……？ ここまで、マッサージするのか……？）

「今日はこの部分の血流を改善し、骨盤内に溜まった老廃物を排出していきます。まずはご自身のお身体の状態を正しく知っていただくことから始めましょう」

神崎はそう言うと、ワゴンから潤滑オイルのボトルを手を取った。とぷとぷ、と透明で粘性のある液体が、彼の長い指にたぷりと注がれる。オイルに濡れた指がやけに官能的で、俺の喉はごとくりと鳴った。

「それでは始めます。どうか力を抜いて、ゆっくりと呼吸を続けてくださいね」

耳元でそう囁くと、神崎はオイルをまとった指を、俺の窄まりへとゆっくりとあてがった。

第一章 論理を溶かす舌

神崎はまず、俺の膣口には直接触れず、外陰部全体にたぷりとオイルを垂らした。ひんやりとした感触に、腰がびくんと小さく跳ねる。

「施術の順序として、最初に外側の血流から整えていきます。大陰唇、小陰唇、そして—」

神崎の人差し指が、俺のヒダの奥に隠れていた小さな突起に、そっと触れた。

「ひ、あ、や……ッ」

「こちらが陰核、いわゆるクリトリスです。触れただけでかなり敏感に反応されていますね」

神崎の指が、オイルを纏ってぬるりと粘膜を滑る。触れられただけで、突起の先端から電流が走ったような鋭い快感が背筋を駆け抜ける。

（なんだこれ……自分の身体なのに、こんなに感じるのか……？）

「ここには非常に多くの末梢神経が集中しています。末端の血流が滞ると、このように過敏に反応することがあるんですよ」

神崎はそう言いながら、人差し指と中指でクリトリスを挟み込み、左右に小刻みに揺さぶり始めた。

「あ……っ、ん、……ッ！ あ、あ……っ」

声を押し殺そうと奥歯を噛み締めるが、粘膜をなぞる繊細な刺激に、喉から熱い吐息が漏れ出す。

「声は抑えなくて結構です。むしろ、吐息として外に出すことで副交感神経が優位になり、血流がより促進されますから」

神崎の指が、今度は爪の先でクリトリスの根元をかりかりと弾いた。

「んあ……ッ！ あ、そこ、やさしく……うッ」

「ここは性感帯の中心です。まだ十分に開発されていませんが、定期的にケアすれば、より深いリラクゼーション効果が得られるようになりますよ」

（開発……俺の身体が、開発されるのか……？）

自分の身体の未知の部分を探られ、開発されていく。その恥辱と、抗いがたい快楽。俺は自分の意思とは関係なく、神崎の指を求めて腰を揺らし始めていた。

「続いて、包皮をかぶせた状態で間接的に刺激していきます。粘膜が薄い部分ですから、まずは優しい圧から慣らしていきましょう」

神崎はそう言うと、俺のクリトリスの包皮をそっと被せた。まだ誰にも触られたことのない突起は、薄い皮の下でびくびくと脈打っている。彼の人差し指が、包皮の上からゆっくりと円を描くようにぐりぐりと押し潰し始めた。

「ん……ッ」

直接触れられているわけではないのに、鈍くて深い快感がじわじわと根元に溜まっていく。包皮越しに伝わる指の熱と圧力。粘膜が擦れる鋭さはないが、腹の底から込み上げてくるような持続的な疼きがあった。

（直接じゃないのに、なんでこんなに……ッ）

包皮の下で、クリトリスがぷっくりと膨らんでいくのが自分でもわかる。薄い皮を内側から押し上げ、指の腹に押し返すほどに肥大していた。神崎はその反応を見極めるように、指の腹全体で包み込み、左右に小刻みに揺さぶり始める。

「あ……っ、ん、んん……ッ」

「力を抜いてくださいね。間接的な刺激で血流を促すのも、施術の大切な段階ですから」

神崎の冷静な声が、逆に俺の興奮を際立たせる。包皮の上からぐりぐりと押し潰され続けるうちに、クリトリスはさらに充血し、先端が皮を突き破ってしまいそうなほど硬く勃起していた。

「ずいぶん血流が良くなりました。ではここで、包皮を剥いて直接の状態を確認させていただきます」

神崎の指が、包皮をゆっくりと押し下げていく。薄い皮が剥がされ、クリトリスが完全に露出した瞬間、外気に触れただけでびりびりと痺れるような過敏さが走った。

「あ……見ないで……ッ」

剥き出しのクリトリスは、さっきまで包まれていたせいで驚くほど敏感になっている。空気の流れだけで先端がひくひくと震え、触れられてもいないのに尿道の奥がきゅんと疼いた。

「かなり充血していますね。非常に健康的な色です。それでは、直接の血流を確認します」

神崎の人差し指が、剥き出しのクリトリスにそっと触れた。

「ひ、う……ッ！」

さっきまでと同じ指なのに、その感触は全く違った。包皮越しの鈍い圧迫感ではなく、粘膜が直接こすられる鋭利な快感。指の腹のざらつきが、クリトリスの表面をなぞるたびに、背筋を電流が駆け抜ける。

（なにこれ……さっきまでと同じ指なのに、全然ちがう……ッ）

神崎は俺の反応を注意深く観察しながら、根元から先端まで、指の腹でゆっくりとなぞり上げた。クリトリスの裏側—もっとも敏感な一点を、わざとゆっくりと撫でられる。

「んぐ……ッ、は、あ……っ」

声を押し殺そうと喉の奥で必死に唸る。唇を噛み締めすぎて血の味がした。それでも、漏れ出る吐息までは止められない。

「橘様、少し確認させてください。今の刺激は、痛みはありましたか？ それとも、気持ちいいと

感じましたか？」

神崎が指を止め、俺の目をじっと見つめる。クリトリスは剥き出しのまま、空気に触れてひくひくと震えている。

「……きもち、いい……です……ッ」

俺は顔を背けながら、消え入りそうな声でそう答えるしかなかった。

「ありがとうございます。正直に教えてくださって。では、その感覚をもう少し深めていきますね」

むき出しのクリトリスに、神崎の指が再び触れる。さっきまでと同じ指のはずなのに、包皮越しとは比べものにならないほど鋭い快感が尾てい骨から背骨を一気に駆け抜けた。

「ひ、ん……ッ♡ ちが、さっきと、全然ちが、ああ……ッ」

「当然です。包皮を剥いた状態では、粘膜が直接刺激されますので、感度が数倍に跳ね上がります。これが本来のクリトリスの感受性です」

神崎の指の腹が、根元から先端までをゆっくりとなぞり上げる。ざらりとした指紋の凹凸が、むき出しの粘膜を直接擦り上げていく感触に、腰がびくんと跳ねた。

（あ……俺のクリトリス、剥かれて……ゆびで、直接、触られたら……ッ♡）

「少しだけ、形状を確認しますね」

神崎はそう言うと、親指と人差し指でクリトリスを摘まんだ。

「ひ、う……ッ♡」

潰されるのとは全く違う。引っ張られる—未知の感覚に、思わず声が漏れる。クリトリスが指の間に挟まれ、軽く引き上げられる。根元からぐっと伸ばされる伸長感。痛くはない。でも、引き伸ばされた粘膜が過敏に空気を感じ、びりびりと震えている。

「つまむの、や……ッ♡ それ、やめ……ッ」

「ご安心ください。形状の確認だけです。……はい、非常に健康で綺麗な形ですね」

神崎は摘まんだまま、クリトリスを左右に小刻みに揺さぶり始めた。それだけで尿道の奥がきゅんと疼き、膀胱のあたりに甘い痺れが広がっていく。我慢できない尿意にも似た切迫感。

「んくッ……♡ あ、それ、だめ……なんか、きゅんってする……ッ♡」

「尿道とクリトリスは神経が近接していますから、このような感覚が生じるのはごく自然なことです」

神崎の冷静な解説とは裏腹に、俺の膣口からはとろりと愛液が溢れ出し、シーツに染みを作っていく。摘まれ、揺さぶられ、引き伸ばされたクリトリスは、自分のものとは思えないほどパンパンに充血し、指に押し返す弾力を持ち始めていた。

（摘まむだけで、こんなに……ッ♡ 俺のクリトリス、先生の指に、挟まれて……ッ♡）

「先端のここですね、一番神経が集まっているのは」

神崎は摘まんだクリトリスを解放すると、今度は人差し指の爪の先で、先端の一点だけをかりかりと引っ掻いた。

「ひ、ああ……ッ♡ そこ、……ッ！」

広範囲の圧迫とは全く違う。ピンポイントで突き刺さるような鋭利な快感。爪の先がクリトリスの先端を引っ掻くたび、尿道の奥がきゅんきゅんと痙攣し、下腹部に甘い熱が溜まっていく。

「ここが陰核亀頭。神経終末の密度が最も高い場所です。当然、一番感じる部分でもあります」

「あ……ッ♡ そこばっか、かりかり……ッ♡」

爪の先がクリトリスの先端だけを執拗に引っ掻き続ける。そのたびに突起はさらに肥大し、色を濃くしていく。神崎の指に押し返すほど硬く勃起した自分のクリトリス—それが、視界の端でびくびくと脈打っているのを、俺ははっきりと見てしまった。

（俺のクリトリス……こんなに、大きくなって、先生のせいで……ッ♡）

恥ずかしい。なのに、目が離せない。神崎の指に弄ばれる自分の突起—ついさっきまで小さく隠れていたはずのそれが、今は醜く肥大し、先生の爪先に蹂躪されている。

「ではここで、手のひら全体を使って広範囲の血流を開きます」

神崎はそう言うと、手のひら全体を大きく開き、俺のクリトリスごと恥丘全体を包み込んだ。

「あ……ッ」

温かい掌底が骨盤の縁を覆う。人差し指と中指の股にクリトリスを挟み込みながら、手のひら全体でぐりぐりと円を描くように圧迫し始めた。

「ん、あゝ……ッ♡ なに、これ……広がって……ッ」

「指先だけの刺激とは別の効果があります。手のひら全体で圧をかけると、皮下の血管床がまとめて開放されて、骨盤内全体の血流が一気に改善するんですよ」

（クリトリスだけじゃない……全部、手のひらに包まれて……ッ♡）

神崎の掌底が時計回りにぐりぐりと回るたび、恥丘全体が熱を帯び、肥大した突起が手のひらの窪みにぴったりと収まったまま潰され、撫で回される。膣の奥の子宮口までもがきゅうきゅうと締め、身体の内側から何かが込み上げてくる一。

「あゝ……ッ♡ も、もう、出る……出ちゃ……ッ♡」

「ここで一度こらえてみましょう。そのほうが、内部の施術に移ったときの効果が段違いに上がります」

（まだ、我慢しろって……？ これ以上、我慢したら……ッ♡）

尿道の奥がきゅんきゅんと痙攣し、潮が噴き出しそうになるのを必死に堪える。神崎の手のひらはさらに圧を強め、クリトリスを恥骨ごとミシミシと押し潰した。視界が白く滲み、太腿の内側がガクガクと震える。

「少し器具の力を借りますよ」

神崎はワゴンから小型のローターを取り出した。シリコン製の先端は指先ほどの大きさと、細かな凹凸がついている。

「振動を使って、より深部の血流を促進します。まずは弱めから」

スイッチが入る。低い駆動音。ローターの先端が、剥き出しのクリトリスにそっと押し当てられた。

「ひ、あ……ッ♡」

指とは全く違う。細かく震える振動がクリトリスの先端から根元までを休みなく刺激する。粘膜がぶるぶると震え、その震動が尿道の奥まで響いてきた。

「あゝ……ッ♡ なにこれ、指より、ずっと……ッ♡」

「振動は血流促進に特に有効です。少し強度を上げてみましょう」

神崎がダイヤルを回すと、振動が一段階強くなった。ぶつぶ、という音が施術室に響く。クリトリスの先端に集中していた振動が恥丘全体に広がり、骨盤ごと揺さぶられているような錯覚に陥

った。

「んぐッ……♡ あ、あゝ、あゝ……ッ♡ せんせ、これ、つよ……ッ♡」

「強さはまだ三段階あります。どのあたりまで試してみますか」

（これ以上……？ もう無理なのに……ッ♡）

振動がさらに強くなる。クリトリスが自分の意思とは関係なく激しく脈打ち、膣がきゅうきゅうと締まる。尿道の奥から熱いものが込み上げてきた。

「あゝ……ッ♡ もう、でる……でちゃ……ッ♡」

「では、一度解放してみましょう。そのほうが身体も楽になります」

神崎がローターをクリトリスの先端にぐっと押し付けたまま、強度を最大にした。

「あゝ——！！♡♡」

潮が勢いよく噴き出す。尿道を熱いものが駆け抜け、シートに大きな染みが広がった。全身がガクガクと痙攣し、俺は白目を剥いて舌をだらりと垂らした。

（ローターで……クリトリスだけで、イカされた……ッ♡）

ぐったりとベッドに沈み込む俺を見下ろしながら、神崎は静かにローターを置いた。

「いい反応です。外陰部の血流はだいぶ改善されました。次は粘膜の状態を、舌で確認させていただきます」

「……舌……？ え、ちょっと、それって……」

俺が戸惑う間もなく、神崎はベッドの端にしゃがみ込み、俺の両脚を肩に担ぎ上げた。そして、ぐっしょりと濡れそぼった秘部に、その端正な顔を近づける。

「失礼します」

生温かい吐息が敏感になったクリトリスにかかったかと思うと、神崎の舌がねっとりと俺の割れ目を根元から先端まで舐め上げた。

「ひうッ……！♡ あ、あ……ッ」

舌のざらざらした表面が、クリトリスの先端を直接くすぐる。ローターとも指とも全く違う、粘着的で柔らかく、しかし確かにざらついた感触。脳が焼き切れそうな快感に、俺はベッドの端をぎゅっと握りしめ、背中を大きく反らせた。

（舌……先生の舌が、俺のクリトリスを……ッ♡）

「ん……ちゅ……れろ……っ」

神崎は無言で、クリトリスの根元を唇で優しく食み、先端を舌先でちろちろと弾いた。その間も、彼の目は俺の表情をじっと観察している。見られている。舐められている。こんなに恥ずかしいことを、じっくりと。

「ん、んんっ……！♡ あ、やめ……舐めるの、だめ、きたな……ッ♡」

「汚れてなどいませんよ。とても綺麗な粘膜です。味も正常ですし、健康そのものです」

神崎は淡々とした口調でそう言うと、再び舌をクリトリスに這わせた。先端を舌でくるくると円を描くように舐め、根元を唇で吸い、尿道口のすぐ上のくぼみを舌先でほじるように刺激する。

「あゝ……ッ♡ 舌、入って……ッ♡ せんせ、そこ、ちが……ッ」

「尿道口のすぐ上にある、スキーン腺という組織の周辺ですね。ここは特に敏感な方が多いんです」

（そんなところで……舐められてる……ッ♡ 俺のクリトリス、先生の口の中で、吸い上げられて……ッ♡）

神崎の舌がクリトリスの先端を捉え、ちゅうっと音を立てて吸い上げた。

「あゝ——！！♡♡」

その瞬間、先ほどとは比べものにならない深い絶頂が襲いかかった。潮が再び噴き出し、神崎の顔にかかるのも構わず、俺は白目を剥いて舌をだらりと垂らした。

（ああ……今の、何……？ 指より、ずっと……気持ちいい……ッ♡）

神崎は顔にかかった潮を手の甲で拭いながら、静かに立ち上がった。

「とても良い反応でした。外陰部の血流はこれで問題ありません。続いて内部の施術に移ります」

俺は荒い息を繰り返しながら、うつ伏せのままぐったりとベッドに沈み込みつつ、しかし心の奥では先ほどの舌の感触が強烈に焼き付いていた。熱くて、柔らかくて、それでいて容赦なくて――。

（もっと、舐められたい……）

そんな思考が自分の中に湧き上がっていることに、俺は軽い衝撃を覚えた。

潮を吹き終えたばかりの身体は、まだ小刻みに震えていた。太腿の内側は自分の潮と愛液でぐっしょりと濡れ、シーツには大きな染みが広がっている。クリトリスは剥き出しのまま、空気に触れるだけでぴりぴりと疼くほど過敏になっていた。

（今の……なんだったんだ……）

指でもローターでもない。神崎の舌がクリトリスを吸い上げた瞬間、全身が爆発するような絶頂。あれがクンニというものなのか――いや、そんな知識はどうでもいい。ただ、もっとあの舌で触れてほしい。身体の奥が、まだ何かを欲しがっている。

ぐったりとベッドに沈み込む俺の背中を、神崎の手のひらが優しく撫でた。

「初めてのクンニでここまで反応される方は珍しいですよ。橘様は舌への感受性が非常に高い。良いことです」

（良いこと……？ 俺、さっきまで声我慢するので必死だったのに……）

「ただ、外陰部の刺激だけでは骨盤内の深い部分までは届きません。内部の血流も一緒に改善しないと、本当の意味でのリリースにはならないんです。少し休んだら、中もほぐしていきましょう」

（中……？ 指を、入れるのか……？）

初めて入ってくる異物への警戒心と、それと同じだけの期待。さっきのクンニで、自分の身体がどれだけ敏感になっているか、嫌というほど思い知らされていた。神崎の指が入ったら――どうなってしまうんだろう。怖い。でも――。

「……お願いします」

俺はうつ伏せのまま、かすれた声でそう答えていた。怖さより、もっと気持ちよくなりたいという欲求が勝っていた。自分の身体の、まだ知らない場所を知りたい――そんな探求心にも似た衝動が、確かに胸の奥で脈打っている。

「ありがとうございます。では、水分を少し摂ってからにしましょう。たくさん潮を吹かれましたから」

神崎はペットボトルの水を差し出し、俺の背中を支えて上半身を起こしてくれた。こくこくと水を飲む喉の動きを、彼は静かに見守っている。その眼鏡の奥の目が、少しだけ優しく細められた気がした。

（この先生は……どこまで見通してるんだろう……）

水分補給を終え、再びベッドに仰向けになる。心臓がまだうるさい。でも、さっきまでのような「何をされるかわからない恐怖」はもうなかった。代わりに、「これから何をされるか楽しみだ」という期待が、腹の奥で小さく疼いている。

「それでは、内部の施術に移ります」

神崎は新しいオイルを手に取り、たっぷりと指に垂らした。ぬらぬらと光るその指が、俺の膣口へとゆっくりと近づいてくる。

（来る……）

俺はシーツをぎゅっと握りしめ、その瞬間を待った。

神崎の指が、まだ潮で濡れそぼった膣口に触れる。ぬるり、と人差し指が沈み込んできた。内部の施術は、予想を超えて深く、そして容赦なかった。

「あ……ああ……ッ」

初めて入ってくる異物の圧迫感。膣壁を押し広げられる感覚に息が詰まる。しかし痛みはない。むしろ、待ち望んでいたものがようやく来たような充足感が、腹の奥をじんわりと満たしていく。

「問題なく挿入できていますね。力を抜いて、そのままゆっくりと息を吐いてください」

神崎の指がさらに深く進み、第二関節、そして根元まで埋め込まれた。そのとき、指の腹が膣の前壁―腹側にあるざらざらした部分を、ぐっ、と押し上げた。

「んんっ……！♡ あ、そこ……何か……ッ」

「ここがGスポットです。尿道海綿体という組織に包まれていて、血流が非常に滞りやすい場所なんです。これからここを重点的にほぐしていきます」

（Gスポット……？ そんなの、初めて聞いた……なのに、そこ触られると、変な感じが……♡）

神崎の指が、ざらざらした部分を狙ってぐりぐりと圧迫する。単なる異物感ではなく、内側から直接、尿意にも似た切ない快感が込み上げてくる。腰は意思とは無関係に跳ね上がった。

「あ……♡ そこ、やめ……へんな、感じ……ッ」

「変な感じ、というのは具体的にどんな感覚ですか？ 言葉にできますか？」

（この先生、また……♡ わかってるくせに……♡）

「おしっこ……したくなって……でも、ちがくて……お腹の奥が、きゅって……♡」

「それは非常に正常な反応です。Gスポットへの刺激は尿道に近接しているため、そのような尿意にも似た感覚が生じるんです。恥ずかしがる必要はまったくありません」

神崎の指がGスポットをぐりぐりと圧迫し続ける。二本の指で挟み込まれ、ゆっくりと抜き差しされるたびに、ぐぼ、くちゅ、と愛液とオイルが泡立つ音が響いた。

「あ、あ、あ……♡ なんか、ほんとに、出ちゃいそう……♡」

「我慢せずに、出していいんですよ。それが骨盤内に溜まっていた老廃物ですから」

（これ……出ちゃう……出ちゃう……♡）

尿道を必死に締めようとしたが、神崎の指がGスポットを押し込むたびに締めりは緩んでいき、太

腿の内側を生温かい液体が伝い始めた。

「あゝ……ッ♡ も、もう、漏れ……ッ」

「ここで少しでも耐えてみましょう。溜め込んだほうが、排出時の効果が高まります。……こちらの手も使いますね」

神崎はそう言うと、膣内の指を抜かずに、もう片方の手を俺の下腹部—膀胱のすぐ上に置いた。そして、ぐっ、と上から圧迫した。

「ひ、うゝ……ッ♡ そこ、押さないで……ッ♡」

「膀胱の上から圧を加えると、Gスポットへの刺激が増幅されるんです。そろそろ解放しましょうか」

神崎の指がGスポットをさらに強く押し上げ、下腹部への圧迫と同時にぐりぐりと執拗にノックし始めた。内側と外側、両方から責め立てられる。尿道の奥がきゅんきゅんと痙攣し、腹の底から熱いものが込み上げてくる—。

「あゝ——！！♡♡」

視界が真っ白に染まる。尿道を熱いものが勢いよく駆け抜け、潮が噴き出した。透明な飛沫がアーチを描いてベッドの下を叩く。

（出てる……俺の潮……先生の指で、Gスポットだけで……ッ♡）

全身がガクガクと痙攣し、白目を剥いて舌をだらりと垂らした。潮はまだ止まらず、床を濡らし続けている。ようやく潮が止まると、俺の身体はマリオネットの糸が切れたようにぐったりと沈み込んだ。

「非常に良い排出量ですね。骨盤内に溜まっていたものがしっかりと流れ出ました」

神崎はゆっくりと指を引き抜き、俺の腹を優しく撫でた。太腿や腹は痙攣の余韻でまだぴくぴくと震えている。

「では続けて、粘膜の状態を舌で確認します」

（また……来るのか……あの、舌が……ッ♡）

俺は荒い息を繰り返しながら、再びのクンニを待ち受けていた。怖い。でも、それ以上に、あの舌の感触をもう一度味わいたい。論理も理屈も、もうどこかへ吹き飛んでいた。

「それでは、改めて舌で確認しますね」

神崎は再びベッドの端にしゃがみ込み、俺の両脚を肩に担ぎ上げた。ぐっしょりと濡れそぼった秘部に端正な顔が近づく。

「失礼します」

生温かい吐息が敏感になったクリトリスにかかったかと思うと、神崎の舌がねっとりと割れ目を根元から先端まで舐め上げた。

「ひうッ……！♡ あ、あ……ッ」

舌のざらざらした表面がクリトリスの先端を直接くすぐる。Gスポットへの圧迫ですでに過敏になっていた突起が、舌に絡め取られるように震えた。

「ん……ちゅ……れろ……っ」

神崎は無言で、膣口から溢れる蜜を舌で掬い取るように舐め、クリトリスの根元を唇で優しく食み、先端を舌先でちろちろと弾いた。その間も、彼の目は俺の表情をじっと観察している。

（み、見られてる……舐められてる……こんなところを、じっくりと……ッ♡）

「ん、んんっ……！♡ あ、やめ……舐めちゃ、きたな……ッ♡」

「先ほども申し上げましたが、まったく汚くありません。むしろ、とても綺麗な状態ですよ」

神崎は淡々とした口調でそう言うと、再び舌を膣口に沈み込ませた。ぐちゅ、じゅる、とわざと音を立てて愛液を啜られる。

（ああ……こんなの……気持ちよすぎる……ッ♡）

神崎の舌が再びクリトリスへと戻ってくる。今度は舌全体ではなく、舌先を鋭く尖らせ、剥き出しの先端だけを狙い澄ましたように、ちろ、ちろ、と弾いた。

「ひ、あ……ッ♡」

指やローターの振動とは全く違う。舌先の一点だけが触れる、繊細で、むしろ焦らされているようなもどかしい刺激。クリトリスの先端だけを断続的にちょこちょこ突かれるたび、尿道の奥がきゅんきゅんと小さく痙攣した。

「それ、ちょこちょこ……ッ♡ もっと、ちゃんと、さわって……ッ」

「焦らされているようにお感じですか？ これも施術の一環でして、微弱な刺激を断続的に与えることで、血流がより深部まで促進されるんです」

（ちが、そんな説明いらないから……もっと、舌で……ッ♡）

クリトリスが勝手に舌を追いかけて始めているのに気づいた。舌が離れるたび、突起がぴくぴくと動いて、もっと触れてほしいと自ら強請っている。恥ずかしいのに、身体は正直で、腰が浮きそうになるのを必死に堪えた。

「素晴らしいですね。クリトリスが自発的に動き始めています。性感の開発が順調に進んでいる証拠です」

神崎はそう言うと、舌先をさらに尖らせ、クリトリスの先端の一点だけをちろちろちろちろと小刻みに弾き続けた。

「あ……ッ♡ そこ、さきっぽ、やめ……ッ♡ いじめないで……ッ♡」

「いじているのではありません。一番敏感な部分を集中的にほぐしているんです」

（うそだ……絶対楽しんでる……この先生……ッ♡）

舌先が離れては触れ、触れては離れ—その断続的な刺激に、クリトリスはパンパンに充血し、愛液がとめどなく溢れ、太腿を伝ってシーツに染み込んでいった。

「ではここで、舌の使い方を少し変えてみますね」

神崎の舌が不意にその形を変えた。さっきまで尖らせていた舌先を今度は広く平たく伸ばし、クリトリス全体をべったりと覆い尽くす。

「あ……ッ」

熱い。舌の体温が、剥き出しの粘膜にじんわりと染み込んでくる。さっきまでのちろちろとした点の刺激とは全く違う—広く、温かく、包み込まれるような感触。

「さっきと、ちが……温かい……ッ♡」

「舌の表面積を最大に使うと、広範囲の血流を一度に促進できます。先ほどの局所刺激とは別の効果を感じていただけたと思います」

神崎の舌が、クリトリスを覆ったままゆっくりと上下に動き始めた。ざらり、ざらり、と舌の凹凸が突起全体をくまなく擦り上げていく。

（ああ……クリトリス、全部……舌で、覆われて……ッ♡）

「ん……っ、は、あ……あ……ッ♡」

神崎の舌が、さらに不意に動きを変えた。舌先を裏返し、普段は触れることのない舌下の滑らかな面で、クリトリスをそっとなぞり上げる。

「なに、それ……ッ♡」

ざらついた舌表面とは全く違う。ぬめりがあって、つるつるしていて、それでいて生温かい——未知の感触に、腰がびくんと跳ねた。

「つるつるして……ッ♡ へんな、感じ……ッ」

「舌の裏側です。表面より滑らかなので、粘膜との摩擦が少なく、より優しい刺激になります。敏感な方にはこちらのほうが適していることもあるんですよ」

（また違った……って、先生、どれだけバリエーションあるんだよ……ッ♡）

舌下の滑らかな面が、クリトリスの先端から根元までをゆっくりと往復する。ざらつきのない分、刺激は柔らかく、しかしそのぬめりが逆に粘着的で、突起全体を舌に絡め取られるような感覚。クリトリスが舌に包まれて、溶かされているような——

「ん、んん……ッ♡ あ、やわらか……舌の、うらがわ……ッ」

「気に入っていただけたようですね。ご自宅でのセルフケアの参考にもなさってください」

（セルフケアって……できるわけないだろ、こんなの……ッ♡）

舌下のぬめりがクリトリスの先端をくるくると円を描くようになぞるたび、尿道の奥がじんわりと痺れ、腹の底に甘い熱が溜まっていく。擦られる刺激ではない、持続的で逃げ場のない快感。

クリトリスから舌が離れた瞬間、取り残された突起がひくひくと空気を噛んだ。冷たい外気に触れてぴりぴりと疼く先端。だが、神崎の舌はすでに次の場所へ。

窄まりに、生温かい吐息がかかった。

「あ……ッ」

舌先が、膣口をくるくると円を描くようになぞり始める。指が入ってくる前の入り口を、唾液と愛液でぬめる舌が優しく撫で回す。

「そこ、入り口……ッ なに、して……ッ」

「内部の粘膜の状態も確認しています。とても柔らかくほぐれていますね。問題ありません」

神崎の舌先が、窄まりに浅く沈み込んだ。内側のひだをそっと押し広げ、くるりと一周する。指とは比べものにならないほど柔らかく、しかし確かにざらついた異物が、膣口の内側を直接くすぐる感覚に、腰が跳ねた。

「ひ、あ……ッ なか、舐めないで……ッ」

「中まで確認させてください。異常がないかを見るために必要なことですので」

（確認って……舌で、俺の膣の中まで……ッ）

膣口から溢れる愛液を、神崎がじゅる、と音を立てて啜った。自分でも聞いたことのない下品な水音が施術室に響き、耳まで熱くなる。

神崎は舌先を少しだけ奥まで差し入れ、内側のひだを一本一本なぞるように舐め分けていく。そのたびに膣壁がきゅうきゅうと締めまり、舌を押し返そうとするのに、逆に奥からどろりと新たな蜜が溢れ出して、それをまた神崎がじゅるりと啜った。

（ああ……俺の膣、舌でほじられて……愛液まで飲まれてる……ッ♡）

舌が膣口をくちくちと押し広げるたび、腹の奥の子宮口がきゅうっと疼き、尿道のあたりに甘い

痺れが溜まっていく。クリトリスから離れているのに、むしろ離れているからこそ、舌の動きの一つ一つが鮮明に感じられた。

神崎の舌が、ふと止まった。ほっとしたような、物足りないような—そんな矛盾した感覚が胸をよぎる間もなく、今度は唇がクリトリスの根元をそっと食み、先端を口に含んだ。

「ん……ッ♡」

そして、ちゅうっ、と音を立てて強く吸い上げられた。

「ひ、ああ……ッ♡」

その瞬間、尿道の奥まで一気に吸引されるような鋭い快感が走り、腰が跳ね上がる。それと同時に—ぬるり、と熱い指が膣口に触れた。

「あ……ッ？ ま、待って、同時に……ッ」

神崎は答えず、クリトリスを唇で吸い上げながら、人差し指が窄まりに浅く沈み込み、Gスポットの手前をくちくちと往復し始めた。

「あゝ……ッ♡ 同時に……舌と指、両方……ッ♡」

舌がクリトリスを吸い上げるリズムと、指が膣を搔き回すリズムが、わざとずれている。吸い上げられた瞬間に指が抜け、指が奥を押した瞬間に舌が離れる。二つの快感が重ならず、交互に、時に不意に同時に襲いかかり、脳が処理しきれない。

「んぐッ……♡ せんせ、それ、ずる……ッ♡ わざと、ずらして……ッ」

「わざとではありません。舌と指では神経の伝達速度が異なりますから、自然とリズムにずれが生じるんです」

（うそだ……絶対わざとだ……この先生、俺がもがくのを楽しんで……ッ♡）

舌先がクリトリスの先端をちろちろと弾きながら、指が膣の前壁をぐっと押し上げる。尿道の奥がきゅんと疼き、膀胱のあたりに甘い痺れが広がった。舌が離れた瞬間に指が奥を突き、指が抜けた瞬間に唇が吸い上げる。その交互責めに、腰は浮きっぱなしで、太腿の内側がガクガクと震えた。

「あゝ、あゝ、あゝ……ッ♡ だめ、これ、ずっとイけな……ッ♡ イきそで、イけな……ッ♡」

「それがいいんです。絶頂の直前で留めることで、骨盤内に血流が滞留し、この後の排出がより深くなります」

（そんなの、知らな……ッ♡ でも、ずっとイきそうでイけなくて、腹の奥が熱くて……ッ♡）

「あゝ あ……ッ♡ せんせ、お願い……もっと、ちゃんと……ッ♡」

「もっと、というのは具体的に、何をどのようにしてほしいですか？」

（この、鬼……ッ♡ わかってるくせに……ッ）

「ゆ、指……もっと奥……舌も、もっと強く……お願いします……ッ♡」

「わかりました。では、ご要望の通りに」

神崎の指が一気に奥まで沈み込み、ざらざらしたGスポットをぐっと押し上げる。同時に舌がクリトリスの先端を捕らえ、ちゅうっと強く吸い上げた。

「あゝ——！！♡♡」

二つの刺激が同時に決まった。尿道を熱いものが駆け抜け、潮が噴き出しそうになる。しかし神崎はまだ止めず、指でGスポットをぐりぐりと押し潰しながら、舌でクリトリスを吸い続けた。

（イク……舌と指、同時に……ッ♡ もう、どっちがきもちいいか、わかんない……ッ♡）

絶頂の余韻でクリトリスがまだひくひくと震えている中、神崎の舌がゆっくりと場所を変えた。クリトリスから離れ、さらに下へー。

「え……ちょ、まさか……っ」

舌先が、尿道口のすぐ上のくぼみに触れた。

「ひ、うゝ……ッ♡」

「尿道口のすぐ上のくぼみです。血流の最終確認をさせてください」

「そこ、おしっこの穴……ッ♡ 舐めちゃダメ……ッ」

俺は必死に腰を引こうとしたが、神崎の両手が太腿をしっかりと押さえていて逃げられない。舌先が、尿道口のすぐ上のくぼみを、ほじるように、くりくりと円を描いて刺激し始めた。

「ひ、うゝ……ッ♡ そこ、舌、入って……ッ♡ ちが、入り口じゃなくて……ッ♡」

Gスポットを圧迫されたときの尿意とは全く違う。尿道の入り口そのものを、外側から直接くすぐられるような、鋭くてむず痒い切迫感。

「尿道口のすぐ上のくぼみには、スキーン腺という組織があります。ここを刺激すると尿意にも似た切迫感が生じますが、先ほどのGスポットの圧迫とは別の神経ルートでの反応です。比較の意味もありますので、少しだけお付き合いください」

（せんせ、そんな解説いらな……ッ♡ それより、舌、どけて……ッ♡）

「あゝ……ッ♡ やめ、ほんとに、でちゃ……おしっこ、でちゃ……ッ♡」

「あと少しだけこらえてみましょう。骨盤底筋群が鍛えられますから」

神崎の舌先が、くぼみからさらに下り、尿道口のまわりをぐるりと一周なぞった。その繊細で執拗な刺激に、尿道の奥がきゅんきゅんと痙攣し、漏らしそうになるのを歯を食いしばって耐える。

（だめ、これ、Gスポットとちがう……もっと直接、おしっこの穴、舐められて……ッ♡）

「んぐッ……♡ せんせ、もう、ゆるして……ッ♡ほんとに、漏れ……ッ♡」

「わかりました。では仕上げて、全体をまとめて解放しましょう」

神崎の舌が尿道口から離れ、再びクリトリスへと戻ったかと思うと、先端を唇で食みながらちゅーっと強く吸い上げた。同時に、人差し指が膣口に深く沈み込み、Gスポットをぐっと圧迫する。

「あゝ——！！♡♡」

尿道を熱いものが勢いよく駆け抜け、潮が噴き出す。透明な飛沫がアーチを描いて床を叩く。それだけじゃない。我慢しきれなかった尿も混ざり、生温かい液体が太腿を伝ってシーツに大きな染みを広げていった。

（ああ……出てる……潮も、おしっこも、全部……先生の舌で……ッ♡）

全身がガクガクと激しく痙攣し、俺は白目を剥いて舌をだらりと垂らした。ようやく潮が止まると、身体はマリオネットの糸が切れたようにぐったりと沈み込んだ。

神崎がゆっくりと指を引き抜き、顔を上げた。彼の口元は俺の潮と愛液でぬらぬらと光っていて、それを手の甲で拭いながら、静かに言った。

「十分にほぐれました。では最後に、一番奥—子宮口のポルチオ施術に入しましょう」

（まだ……あるのか……？ 今ので、もう死ぬほどイったのに……ッ♡）

俺は荒い息を繰り返しながら、涙とよだれと潮でぐしょぐしょの顔のまま、次の施術を待ち受け

ていた。

神崎がワゴンから取り出したのは、細長いシリコン製のディルドだった。表面には細かな凹凸が刻まれ、根元には振動用のスイッチがついている。ずっしりとした重みを感じさせるそれを、神崎は手に取り、たっぷりとオイルを垂らした。

「内部の粘膜も十分にほぐれましたので、最後に一番奥—子宮口のポルチオ施術を行います。骨盤内で最も凝りが深く、そして最も血流の滞りやすい場所です」

「し、子宮口……」

俺はその器具の長さとおさを見て、思わず息を呑んだ。指よりずっと長く、根元は二本分ほどの太さがある。

（あれが、全部、俺の一番奥まで入るのか……）

恐怖で身がすくむはずなのに、膣の奥がきゅんと疼いた。怖いのに、入ってほしい—その矛盾に、自分でも戸惑う。

「今日はこちらの器具を使って、優しくノックするように刺激していきます。痛みは一切ありませんので、ご安心ください」

神崎はそう言いながら、ディルドにたっぷりとオイルを塗り込んでいく。透明で粘性のある液体がシリコンの凹凸をぬらぬらと光らせ、彼の長い指を伝って手首まで滴った。その光景がやけに官能的で、俺の喉がごくりと鳴る。

（入れてほしい……奥まで、届いてほしい……ッ）

膣口はもう、次の刺激を待ち侘びてひくひくと震えている。神崎はそれを静かに見下ろしながら、ディルドの先端をそっと窄まりにあてがった。

「ゆっくりと入れていきますね。力を抜いて、息を吐いてください」

「あ……っ」

ぬるり、と先端が窄まりを押し広げ、沈み込んでくる。指とは比べものにならない質量と固さ。膣壁が異物を拒むようにきゅんと締まったが、オイルと愛液で濡れた粘膜は、ディルドを難なく奥へと導いていった。

「あ……ああ……ッ♡」

入り口を通過した先端が、さらに奥へと進む。膣壁を押し広げられ、内臓を押し上げられるような圧迫感。息が詰まる。それなのに、腹の奥はもっと欲しいと疼き、膣が勝手にディルドを呑み込もうとひくついている。

「上手に啜え込んでいますよ。その調子で、ゆっくりと息を吐き続けてください」

（指よりずっと太い……お腹の中、いっぱい……ッ♡）

神崎の穏やかな声に導かれ、俺はふうっと息を吐いた。その瞬間、膣壁の力が抜け、ディルドがさらに奥へ—ずるり、と一気に進む。ざらざらしたGスポットの上を器具の凹凸が擦り上げ、尿道の奥がきゅんと疼いた。

「んぐッ……！！♡ あ、いま、なかで、あたって……ッ」

「Gスポットを通過しました。よく感じていらっしゃるですね。では、そのまま一番奥まで進めます」

神崎の手がゆっくりと、しかし確実にディルドを押し進めていく。膣壁が器具の形を覚え込むようにきゅうきゅうと締め、シリコンの凹凸が内壁を余すところなく擦り上げた。腹の奥が熱を帯び、子宮口が近づいているのを自分でもはっきりと感じる。あの硬い一点—あと少しで、届く。

ディルドがゆっくりと奥へ進み、ついに一コツン、という小さな衝撃が腹の底に響いた。

「ひ、あああッ！！♡」

内臓の奥で星が散るような衝撃。軟骨のような硬さを持った一点—子宮口に、異物が直接触れている。膣壁のどこよりも硬く、それでいて敏感で、触れただけで全身に電流が走った。

「ここがポルチオ—子宮口です。ちょうど指先くらいの硬さが感じられると思いますが、いかがですか」

神崎は静かにそう言うと、ディルドをほんの少しだけ引き、もう一度コツンと当てた。そのたびに腰は意思とは関係なく跳ね上がり、膣がきゅうきゅうと締まる。

「あゝ……ッ♡ そこ、さわらないで……ッ♡ なんか、へんな、感じ……ッ」

「変な感じ、というのはもう少し詳しく教えていただけますか」

（この先生、また……ッ♡ わかってるくせに……ッ）

「お腹の、一番奥……内臓の裏側まで、届いてるみたいなの……ッ♡ 苦しいのに、もっと触ってほしくて……ッ♡」

「それはとても正常な反応です。子宮口の周囲には非常に多くの神経が集中しています。苦しさや快感が混ざり合うのは、そこがまだ凝り固まっている証拠。今日はここを重点的にほぐしていきますよ」

神崎の指が、ディルドの根元をゆっくりと回す。先端が子宮口をぐり、と圧迫し、そのまま円を描くように周囲のくぼみをなぞった。内臓の一番奥を、異物が這い回っている—その感覚に、背筋がぞくぞくと震える。

（子宮口……俺の一番奥……触られてる……ッ♡ 内臓の裏側まで、届いてる……ッ♡）

「では、このまま振動を入れます。少し強めに感じるかもしれませんが、力を抜いてくださいね」

神崎の指がディルドの根元にあるスイッチを押す。低い駆動音が静かな施術室に響き、その瞬間—子宮口に当てられた先端が、ぐりぐりと震えながら動き始めた。

「あゝ……ッ♡ あ、あゝ、あゝ……ッ♡」

軟骨のような硬い一点が、ぶるぶると震える。さっきまでの静止した圧迫とは全く違う。振動が子宮口を休みなくノックし、その震えが子宮全体に波及していく。内臓の一番奥が揺さぶられている—そんな感覚に、腹の底から鈍くて深い快感が込み上げてきた。

「あゝあああ……ッ♡ お腹の一番奥……振動で、潰される……ッ♡ なにこれ、気持ち……いい……ッ♡」

「子宮口は平滑筋という不随意筋でできています。振動を与えると蠕動運動が促され、その動きが周辺の血流を一気に改善するんです。今、子宮全体が活発に動き始めていますよ」

（だから、そういう解説はいらな……ッ♡ でも、子宮が……動いてる……内臓の一番奥が、先生の器具で震えてる……ッ♡）

振動が子宮口からじわじわと広がり、膀胱の裏側をくすぐり、背骨の付け根まで痺れが響く。自分の意思とは関係なく、膣がきゅうきゅうとディルドを締め付け、もっと奥へと呑み込もうとしていた。腹の奥が熱を帯び、じんじんと溶けていくような快感に、俺はシーツを握りしめながら、ただ声を漏らし続けることしかできなかった。

「強度を一段階上げてみましょう。より深部まで振動が届きます」

神崎の指がスイッチをさらに押し上げた。ぶつぶ、という駆動音が強まり、子宮口をノックする振動が一気に増幅される。

「あ、あ、あ……ッ♡ せ、先生……なんか、お腹の奥、熱くなって……ッ♡」

「血流が非常に良くなっています。子宮内膜まで振動が届いている証拠です。素晴らしい反応ですね」

（子宮内膜……そんな奥まで……ッ♡ 振動が、内膜を震わせてる……ッ）

子宮口だけでなく、子宮全体が揺さぶられている。振動が内臓の壁を伝わり、膀胱の裏側をくすぐり、直腸のあたりまでじんじんと痺れが響いてきた。背骨の付け根にまで波及した震えが、尾てい骨から頭蓋の奥までをびりびりと震わせる。

「んくッ……♡ あ……ッ♡ なんか、また、おしっこしたく……ッ♡」

「いいんですよ。それが骨盤内に溜まっている老廃物です。どうか我慢せずに、すべて出し切ってしまいましょう」

神崎の声は相変わらず穏やかで、施術者のそれだ。なのに、ディルドは容赦なく子宮口をぐりぐりとノックし続けている。振動は強さを増すばかりで、尿道の奥がきゅんきゅんと痙攣し、膀胱のあたりに甘い痺れが溜まっていく。

（ああ……子宮が、内膜まで、全部震えてる……ッ♡ お腹の奥、溶けちゃう……ッ♡）

膣壁がディルドの形を覚え込むようにきゅうきゅうと締め、シリコンの凹凸が内壁を余すところなく擦り上げた。子宮口のすぐ手前のざらつきを器具が通過するたび、尿道の奥がきゅんと疼いて、漏らしそうになるのを必死に堪える。

「では仕上げに、クリトリスも同時に刺激して、一気に排出させましょう」

神崎はディルドを子宮口に当てたまま、もう片方の手を俺のクリトリスに伸ばした。振動と圧迫で過敏になりきった突起を、親指の腹でぐりぐりと押し潰す。

「あっ——！！♡」

股間から、熱い液体が勢いよく噴き出す。潮だ。前回よりも大量の、止めどない潮。ぴしゃあ、と床を叩く音。

（潮、出てる……俺の子宮、ぎゅってなってる……ッ♡）

全身がガクガクと激しく痙攣し、白目を剥いて舌をだらりと垂らした。腹の奥がぎゅうっと縮み上がり、子宮が痙攣しているのが自分でもわかる。今までで最も深く、最も長い絶頂。意識が遠のく。

（ああ……子宮、ぐってなってる……一番奥から、来た……ッ♡ 今までのと、全然ちがう……ッ♡）

クリトリスでもGスポットでもない。子宮口—内臓の一番奥から湧き上がったこの快感は、全身を根こそぎ揺さぶり、腹の底に溜まった熱を奪っていく。頭の中が真っ白になって、何も考えられない。ただ、子宮が震えている。先生の器具で、一番奥をノックされて、子宮が喜んでい—。

どれだけそうしていたか。ようやく潮が止まり、俺の身体はマリオネットの糸が切れたようにぐったりとベッドに沈み込んだ。太腿や腹は痙攣の余韻でまだぴくぴくと震え、膣はディルドをくわえたまま、きゅうきゅうと締まっている。

神崎がゆっくりとディルドを引き抜いた。ずるり、と長い時間をかけて抜けていく感触に、膣壁が名残惜しそうに吸い付く。抜けきった瞬間、どろりと白濁した愛液が溢れ出し、太腿を生温かく伝ってシーツに染み込んでいった。

「素晴らしい排出量です。これで骨盤内の老廃物は、ほぼ完全に排出されました」

神崎は使い捨てのタオルで手を拭きながら、痙攣の余韻が治まらない俺の腹を優しく撫でた。その手つきは、施術者のそれでありながら、どこか慈しむような温かさがあつた。

「本日はこれで全て終了です。橘様、本当にお疲れ様でした。骨盤内の老廃物も綺麗に排出され、血流も大幅に改善されていますよ」

「は、ひ……ッ♡」

まだ舌が上手く回らない。ぐったりとしながらも、神崎の声だけは妙にクリアに聞こえた。

「橘様は、特に外陰部への舌刺激に対する感受性が非常に高いようです。今日の施術中、クンニの際の反応が群を抜いて良好でした。もしご興味があれば、次回はクンニに特化した60分の集中コースもご用意できますが」

（クンニ……60分……？ あの舌が、ずっと……？）

俺のクリトリスが、その言葉にぴくりと震えた。さっきまであんなにイカされて、もう何も考えられないはずなのに、「クンニ60分」という単語だけが脳内で異様な輝きを放っている。

「ぜひ、それで……ッ」

自分でも驚くほど早口に、俺はそう答えていた。論理じゃない。身体が、あの舌をもっと欲しいと叫んでいる。

「ありがとうございます。次回のご予約は、一週間後の同じ時間で承りますね」

「……お願いします。毎週……通わせてください……ッ♡」

理系エンジニア・橘優斗は、この日、完全に神崎の舌—クンニの快楽の虜となった。

帰り道の間も、自宅に着いてからも、布団に入ってから、あの舌の感触が頭から離れない。特に、舌先がクリトリスをちろちろと弾く繊細な刺激、舌全体で覆い尽くされる温かさ、舌裏のつるつるとしたぬめり、そして尿道口のくぼみをほじられるあの切迫感。

（来週……来週、またあの舌が……60分、ずっと……）

暗闇の中で、自分のクリトリスにそっと触れてみた。まだ少し腫れていて、触れるだけでびりっとした痺れが走る。でも、自分の指では、神崎の舌のあの感覚は決して再現できない。

（早く……一週間、早く過ぎてくれ……）

それは、三十一年間生きてきて初めての、理屈では説明できない渴望だった。

第一章・了

第2章 クンニ60分集中コース+抱っこ&キス

2-1. 施術前 待ちきれない一週間

あの初回施術から、今日でちょうど一週間。

この七日間、俺—橘優斗は、まともに仕事が手につかなかった。

回路図を眺めていても、頭の片隅に神崎の舌の感触が蘇る。基板のパターン配線をトレースしているはずが、気づけばあのざらついた舌表面が自分のクリトリスを這い回る感覚を反芻している。先端をかりかりと引っ掻かれたときの鋭い痺れ、舌全体で覆い尽くされたときの温かい圧迫感、舌裏のつるつるとしたぬめり、そして尿道口のくぼみをほじられたときの、失禁しそうになるあの切迫感。

「橘、どうした。最近ぼんやりしてるぞ」

週明けのミーティングで、上司にそう声をかけられた。俺は慌てて「寝不足で」とごまかしたが、本当は違う。睡眠時間はむしろ増えている。あの施術の夜は、かつてないほど深く眠れた。身体が疲れ切っていて、余計な思考が全部吹き飛んでいたからだ。

問題は、起きている時間だった。ふとした瞬間に、太腿の内側がじんわりと濡れているのに気づ

く。会議中、プロジェクターの前に立って説明をしている最中に、クリトリスが疼き始める。トイレに駆け込んで自分の指で触れてみるが、何度試しても神崎の舌のあの感覚は再現できない。

（指じゃダメなんだ……あの舌じゃないと……）

自宅のベッドで、潤滑オイルをたっぷり使ってクリトリスを弄ってみたこともあった。包皮を剥き、指の腹で圧迫し、爪の先でかりかりと引っ搔いてみる。気持ちよくないわけではない。でも、決定的に足りない。舌の熱が、ざらつきが、ぬめりが、あの複合的な感覚がどうしても足りなかった。

（早く……土曜日になれ……）

カレンダーの日付を指折り数える。そんなことをしたのは、小学生の夏休み以来だ。

当日の朝、俺は妙に早く目が覚めた。予約は午後二時。まだたっぷり時間がある。しかし、じっとしてられず、部屋の掃除を始めた。普段は手をつけない窓拭きまでし、洗濯機を二度も回し、冷蔵庫の整理までしてしまう。時間が経つのが遅すぎる。

神崎から事前に届いていたメールの指示を思い出し、施術の二時間前から水分を多めに摂取した。ペットボトルの水を二本、時間をかけてゆっくりと飲み干す。前回の「膀胱-子宮連動」の効果を思い出し、少し緊張する。でも、それ以上に期待が勝っていた。

ふと、パソコンを開いて検索窓に「クニニ 60分」と入力してしまった。検索結果にはアダルトコンテンツがずらりと並び、俺は慌ててブラウザを閉じた。顔が熱い。

（これは医療行為だ。整体なんだ。そう自分に言い聞かせる）

論理で納得させようとしている時点で、もう自分の心がどこにあるかは明白だった。でも、そうやって自分を騙さなければ、この緊張と期待に押し潰されてしまいそうだった。

予約時間の十分前、俺は再びあの白いサロンの自動ドアをくぐった。

受付の女性は前回と同じ完璧な笑顔で俺を迎え、個室へと案内する。ラベンダーとユーカリのアロマ。淡い間接照明。すべてが前回と同じなのに、前回とはまったく違う。俺はもう、ここで何が行われるかを知っている。そして、それを心の底から待ち望んでいる自分がいる。

紙のような薄い施術着に袖を通し、ベッドに仰向けになる。心臓がうるさい。太腿の内側はもう、じんわりと濡れ始めていた。

コン、コン。

ノックの音に、心臓が跳ねる。

「お待たせしました、橘様。本日はクニニ集中コースですね」

神崎が入室してきた。変わらぬ穏やかな微笑み、落ち着いた低い声。白衣の下の引き締まった身体。そして――その唇。俺は自分がその唇を凝視していることに気づき、慌てて目を逸らした。

（なにやってんだ、俺……いきなり先生の唇を見るとか……）

「はい……あの、60分、ずっと……？」

「ええ。前半は外陰部全体の血流確認を舌で行い、中盤はクリトリスに集中した吸引刺激、後半は尿道口周辺と膣口のくぼみを重点的にケアします。どうかリラックスして、私の舌に身を任せてください」

（舌に身を任せる……その言い方、ずるい……）

俺はゴクリと唾を飲み込み、小さく「お願いします」と答えるしかなかった。